

日本人起源論研究をしばってきたものごと

斎藤成也

日本人とはどのような人々なのか。その起源をさぐるには、ある程度までは人文社会科学が貢献できるが、古い時代になると自然人類学の研究が中心となる。そこで、日本人起源論におけるさまざまな葛藤を考察する本稿では、自然人類学分野、特に遺跡から出土した人骨の形態学的研究および遺伝的研究の歴史を中心に論じることとする。表1に、自然人類学的見地から日本人起源論にかかわった主たる研究者のリストを生年順に列挙した。

自然人類学では、人類集団の名称はその地理的分布を用いることが一般的である。そこで、国名でもある「日本」そのままを用いた「日本人」あるいは「倭人」のかわりに、最近では「日本列島人」と呼ぶことが多くなっている。斎藤（2015）はさらに踏

みこんで、かつて島尾敏雄が提唱した「ヤポネシア」を用いて、日本列島人の別名として「ヤポネシア人」を用いた。しかしこれは最近の傾向なので、本論考では従来どおり「日本人」を用いる。

さて、日本人の起源と成立については、歴史的に三種類の仮説があると、これまで多くの著書で示されてきた。提唱された順にいうと、置換説、混血説、変形説である。置換説と混血説では、日本列島に大きく二段階の渡来があったとするが、変形説（小進化説ともよばれる）では一回だけと仮定している。

すなわち、置換説では、第一の移住者の子孫が先住民であり、系統の異なる第二の移住者の子孫が現在の日本人であるとする。第一の移住者としては、アイヌ人の祖先が考えられたり、絶滅した仮想的な

表1 主として自然人類学的見地から日本人起源論にかかわった研究者

名前	生没年	略歴
Philipp von Siebold	1796-1866	ドイツ→長崎出島
Edward S. Morse	1838-1925	米国→東大理学部
Erwin von Bälz	1849-1913	ドイツ→東大医学部
John Milne	1850-1913	英国→東大工学部
Heinrich von Siebold	1852-1908	ドイツ
小金井良精	1859-1944	東大医卒→東大医学部
坪井正五郎	1863-1913	東大理動物卒→東大理人類
白井光太郎	1863-1932	東大理植物卒→東大農
鳥居龍蔵	1870-1953	東大理人類→上智大
長谷部言人	1882-1969	東大医卒→京大医→東北大医→東大理人類
清野謙次	1885-1955	京大医卒→京大医
金関丈夫	1897-1983	京大医卒→台北帝大→九大
鈴木尚	1912-2004	東大医卒→東大理学部
池田次郎	1922-2012	東大理人類卒→広島県立医科大→新潟大医学部→京大理人類
植原和郎	1927-2004	東大理人類卒→札幌医大→東大理人類→日教研
山口敏	1931-	東大理人類卒→札幌医大→国立科学博物館
尾本恵市	1933-	東大理人類卒→東大理人類→日教研→桃山学院大
百々幸雄	1944-	東北大医卒→東大大学院→札幌医大→東北大医
宝来聡	1946-2004	京大理人類卒→奈良県立医大→東大理人類→遺伝研→総研大
中橋孝博	1948-	九州大卒→九州大文
徳永勝士	1954-	東大理人類卒→東大理人類→日赤→東大医
篠田謙一	1955-	京大理人類卒→佐賀医大→国立科学博物館
石田肇	1956-	山形大医卒→札幌医大→琉球大医
植原恒彦	1956-	山形大医卒→佐賀医大→北里大
斎藤成也	1957-	東大理人類卒→東大理人類→遺伝研

人々が考えられたりした。

混血説では、第一の移住者の子孫に、それ以降の移住者が混血して現在の日本人となったとする。第一の移住の時期は、縄文時代以前を、第二の移住は弥生時代以降を考えるのが一般的である。もつとも現実的であり、実際に現在支持されているのは、広い意味での混血説である。

一方変形説は、第一の移住者の子孫が、時間的に変化して現在の日本人となったとするが、アイヌ人は考察からはずされている。研究史の上ではもつとも最近に唱えられた説だが、現在では否定されている。

以下では、置換説、混血説、変形説の代表的提唱者を紹介する。ただし、同じ人物が考え方をかえることがあるので、あくまでもその人間が唱えた中心的な説と考えていただきたい。また混血説については、第二次世界大戦の前後にわけて論じた。

一 置換説

フィリップ・フォン・シーボルト Philipp von Siebold、いわゆる大シーボルトは、ドイツ人であったが、オランダ人として、江戸時代に長崎に長く滞在し、鳴滝塾で蘭学を多くの日本人に教えた。日本列島の先住民をアイヌ人とした、アイヌ説を提唱した。

ハインリヒ・フォン・シーボルト Heinrich von Siebold、いわゆる小シーボルトは、大シーボルトの息子であり、父親の提唱したアイヌ説を継承した。モース Edward S. Morse は、一八七七年に来日し、東京帝国大学のお雇い外国人教師として、理学部で動物学を教えた。大森貝塚を発掘し、その結果などから、日本列島の先住民はアイヌ人以前に居住していたとして、プレアイヌ説を提唱した。

ミルン John Milne は、モースとほぼ同時期に東京帝国大学のお雇い外国人教師として、工学部で地

震学・鉱山学を教えたが、人類学にも興味があった。北海道や千島列島を調査し、その結果、本州以南については大シーボルトのアイヌ説を支持したが、北海道については、アイヌ人の前に、コロボツクルなどの先住民がいたと考えた。

坪井正五郎は、日本人として初の人類学者であり、日本人類学会の創設者である。おなじく学会の創設メンバーである白井光太郎がコロボツクル説を否定する見解を発表したのを批判したところから、坪井はコロボツクル説を、結局死ぬまで支持することになる。この、いささか不思議な情熱については、後述するように、本書のタイトルである、「学問をしるもの」のひとつの要素が関係しているように思われる。

小金井良精は、日本における骨人類学の創始者といえるだろう。骨の形態を当時知られていた技法で調べることににより、坪井のコロボツクル説を批判した。すなわち、日本列島の先住民の直接の子孫がアイヌ人であり、しかもかれらは世界の他の人々とは

おおきく異なっているとして、「人種の孤島」という表現が用いられた。その後、現在の日本人の祖先である人々が大陸から渡来し、北海道より南では完全に人間が置換したと考えたのである。二〇一六年にわれわれが発表した縄文人の核ゲノム DNA 配列にもとづく解析結果は、ある意味で小金井説に近いものであった。

二 混血説（第二次大戦前）

ベルツ Erwin von Bälz は一八七六年に来日し、東京帝国大学で二〇年以上にわたって医学を教えた。山口（1999）によれば、日本人の成り立ちについてベルツは三段階の移住仮説を提唱した。第一段階の渡来民は現在のアイヌ人の祖先、第二段階の渡来民は、華北や朝鮮半島の人々、第三段階の渡来民は、マレー民族に似た南方系の人々である。現代の日本人は、これら三種類の渡来民の子孫の混血であるとした。順番はすこし違うが、この三段階渡来説に似

たものを、斎藤 (2015) が発表している。

またベルツはアイヌ人と沖縄人に共通性を見いだしている。これはのちに日本人の二重構造モデルに大きな影響を与えた。アイヌ人と沖縄人に遺伝的共通性があることは、われわれが二〇一二年に発表した論文で確定している。このように先見性のあつたベルツではあるが、彼はアイヌ人をヨーロッパ人に近い系統だと考えており、この点は現在のDNAデータとは相いれない。

鳥居龍蔵は、坪井正五郎の死後、一九二二(大正一一)年に東京帝国大学理学部人類学教室の主宰者(助教授)となったが、不幸な事件によりその二年後(一九二四年)には辞職している。民族学・考古学分野での業績が中心なので、彼の日本人形成論は骨形態の研究者からはあまり注目されていない。実際に山口 (1999) は鳥居の説には触れていない。考古学者の樋口隆康 (1971) によれば、鳥居の説はいわば多重渡来説であるが、重要なのは、つぎの三集団である。

つ、一九二〇年代を中心として、遺跡からの人骨発掘にとりくんだ。現在でも西日本の代表的な縄文時代人骨として知られる岡山県の津雲貝塚や、愛知県よこの吉胡貝塚から多数の人骨を発掘した。これらの人骨のうち、集団のちがいが大きいと考えられる頭蓋骨の形態に着目して解析した。

山口 (1999) は、清野らが頭蓋骨形態を比較して発表した津雲貝塚人(J)、アイヌ人(A)、現代畿内人(M)という三集団間の「平均型差」をつぎのように紹介している・JAⅡ八一・七、JMⅡ九五・六、AMⅡ六三・〇。大きく異なっていると考えられるアイヌ人と現代日本人の距離がもつとも小さいのだから、縄文人(当時は石器時代人と呼んだ)はアイヌ人とも現代日本人とも異なると結論した。

清野らはさらに古墳時代の人骨も収集解析し、彼らが縄文人と現代日本人の中間にくるとした。これらの結果から、清野謙次は骨のデータからはじめて混血説を唱えたことで著名である。

清野よりもずっとあとになって、松村博文は歯

アイヌ人の祖先集団(縄文文化)

朝鮮半島や満洲、沿海州地域の集団(弥生文化)
東北アジアの同系統の集団(古墳文化)

なお、かつこ内はそれぞれの渡来人がなった文化である。これらのほかに、東南アジアの原始マレー系の集団、インドシナの苗族の系統、朝鮮半島にいた漢民族や高句麗、百濟、新羅、任那の人々が次々に渡来し、これらいろいろの時期の渡来人が混血して現代日本人になったとするものである。

もつとも、寺田 (1975) によれば、鳥居も若い時代には「固有日本人説」として知られる、置換説とみなされる考え方をもっていた。樋口 (1971) は、「後の諸学者の新説には、すでに鳥居が喝破している点が少なくない」として、鳥居を高く評価している。筆者は、ヒトゲノムの全塩基配列という膨大なデータを利用すれば、鳥居の考えたような渡来人のさまざまな成分を抽出できるのではないかと考えている。

清野謙次は京都帝国大学の医学部で教鞭をとりつ

の非計測的形質にもとづいた、これら三集団に相当するスミスの距離を以下のように算出した・JAⅡ〇・一一二、JMⅡ〇・三一二、AMⅡ〇・〇九八(Matsumura 2007)。頭蓋計測値と歯の非計測的特徴という異なる指標を使っているが、アイヌ人と現代日本人との距離がもつとも小さく、津雲貝塚出土の縄文人と現代人との距離がもつとも大きいという点では同一であるのが、興味深い。

三 変形説

鳥居龍蔵が辞職したあとを継いだ松村瞭が一九三六年に死去したあと、一九三八年に長谷部言人ことんごが東北大学医学部から東京帝国大学理学部にうつり、人類学科を設立した。長谷部 (1951) は、明確に置換説と混血説を批判している。しかし、清野とちがって、彼の主張を支持する明確なデータをしめしてはいない。

鈴木尚ひさし (1960, 1963, 1971) は、長谷部言人の強

い影響のもと、多くの人骨を比較解析した結果、変形説を支持した。ところが、日本人の形成を論じた部分はおろか、これら三冊において、まったくアイヌ人に触れていない。ようやく一九八三年に刊行した『骨から見た日本人のルーツ』ではじめて、日本人の起源をめぐる学史のところでアイヌ人がでてるだけである。彼自身の日本人形成論には、アイヌ人は登場しない。また、この本では日本人起源論を論じながら、鳥居を一切無視している。鈴木には多くの弟子がいるので、アイヌを、そして鳥居を無視した理由を彼らから間接的に聞き出すことができるかもしれない。

鈴木は、縄文時代から現代にいたる日本人の骨形態の変化がきわめて大きいことを、計測的形質の解析からしめた。しかし、変化のなかには身長や鼻の高さ、あるいは頭示数^{とうしすう}など、渡来人が少なかったと考えられる江戸時代以降のものがあり、これらは遺伝的な変化とはいえない。すなわち、彼が研究に用いた形質は、日本人の系統を論じにくいものなの

である。ここに鈴木業績について大きな矛盾があるといえよう。すなわち、混血なしの時間的な変化を発見したという人類学上の大きな業績が、その変化を示す形質がもはや人類の系統を論じるには不適切であることを明らかにしてしまったのである。特に、頭示数は伝統的に人類学においていわゆる「人種」を分類するのに用いられてきたが、この議論が意味のないものであることを鈴木は明確に示したのである。

筆者は人類学を学んでいた学部学生の際にこの事実を知り、骨を調べても系統は論じられないという認識を得て、当時勉強していた遺伝子の研究こそが系統を論じるのに用いられるべきだと考えたものがある。

四 混血説(第二次大戦後)

東京大学理学部で人類学科を設立した長谷部言人、そのあとを継いで人類学教室を主宰した鈴木尚が変

形説を發展させる一方で、西日本では混血説が大きく發展した。九州大学の金関丈夫^{かねせ ちゆう}は、一九五〇年代に九州北部や山口県でつぎつぎに弥生時代の人骨を発見し、これら弥生人の推定身長が縄文人よりずっと高いことや、頭蓋骨の形態が縄文人と明らかに異なっていることから、水田稲作を伝えた渡来人と土着の日本人との混血があつたと主張した。

水田稲作農耕が最初に日本列島に伝えられたのは、朝鮮半島に近い九州北部なので、そこで縄文人と大きく異なり、朝鮮半島の人々と似た頭蓋を持つ弥生時代の人骨が発見されたことは、日本人の形成論に重要な影響を与えた。金関は一九六〇年に発表した「日本人の生成」という小論(金関 1966に所収)で、「弥生文化とともに、恐らく一定量の人種要素の移入があつたと思われる」と述べている。

その後、計測的形質と異なり、歴史時代の集団に変動が少ない非計測的形質の解析から、これら弥生時代初期の頭骨が現代本土日本人と近いことが明らかに、混血説はゆるぎないものとなった。しか

し、鈴木尚は最後まで変形説に固執した。

日本人類学会・日本民族学会連合大会第三四回大会が一九八〇年に長崎で開催された。筆者もこの大会に参加したが、池田次郎が世話人となって「骨からみた日本人の起源」と題したシンポジウムの最後のほうで、最前列にすわっていた鈴木尚が次のように発言したことをはつきりとおぼえている。「西日本では大陸からの混血があつたかもしれないが、東日本では混血はなかった。すなわち、混血説も変形説もともに正しい」と。鈴木は日本の自然人類学者を輩出した東京大学理学部の人類学教室を主宰していたので、彼の影響はきわめて大きかったようだ。

池田次郎は、一九九八年に発表した『日本人のきた道』のなかで、一九六〇年代から一九七〇年代における日本人起源論の動きを、金関らの渡来説が弱まって鈴木の変形説(池田は小進化説とよぶ)が学会の主流をしめていたが、池田自身は「地域を限定して混血を認める金関説に早くからひかれていた私は、小進化説一辺倒の学会の大勢に疑問を感じ金関

説を高く評価した」と述べている。池田のこの発言は、現在からみると滑稽とすら感じさせられる変形説が、当時いかに人類学の学界で支配的であったのかを、よくしめしている。

池田は鈴木よりも一〇歳年下であり、大先輩である鈴木の主唱していた説に正面切つては反対できなかったという面もあるだろう。

山口敏も、池田次郎と同じく、温厚でかつ多くの分野に眼を配るすぐれた研究者である。本論考で登場する、初の現存者だ。山口(1969)には、彼自身が一九六〇年代にてがけた北海道の続縄文時代の遺跡から発見された人骨が、縄文時代人とアイヌ人に類似していたという研究成果が記されている。これこそ、日本列島北部の人々についての現代の定説である、縄文時代人から続縄文時代人、アイヌ人への連続性を明確にしめたものだ。しかし山口によれば「とくに縄文時代人については、日本人の祖先であつてアイヌとは無縁のものだとする長谷部言人の晩年の説が当時まだ支配的であつた」とあり、ここ

でも長谷部のあやまった考えが当時の学界を左右していたことがわかる。

また次の段落で登場する埴原和郎は、山口敏よりも四歳年長だが、山口がカナダに滞在しているときに開催されたアイヌに関するシンポジウムで、続縄文人にかんする自身の貴重な研究成果を埴原に話されてしまったと、筆者のおこなつた山口へのインタビューで昔をふりかえつていた。埴原が主唱した二重構造モデルについては、山口(1969)の第二章「日本人の地域差」のなかの「日本列島人の重層性」というセクションで、さらりと触れているにすぎない。山口にとつては、日本人がおおまかにみて「二重構成」(彼自身の表現)となつていることは、ある意味では当然のことだったのである。山口は、非計測的形質を日本の形態人類学研究に導入した研究者としても、重要である。この分野については、山口の教えをうけた百々幸雄^{どとゆきお}の最近の著作があるので、あとで述べることにする。

埴原和郎は、日本列島人の成立に関する二重構造

モデルの主唱者として著名だが、このモデルは、英語論文としては一九九一年に発表され、日本語としては一九九五年に人文書院から出版した単行本が代表的なものだ。しかしその二年前に埴原が編集した『日本人と日本文化の形成』では、英語論文を下敷きとして、「日本人集団の形成——二重構造モデル——」と題した章をあらわしている。二〇〇五年に筆者が刊行した『DNAから見た日本人』の原稿を書いて二〇〇四年、埴原の死去する数カ月前に、病気で入院されていることを知らずに彼とのインタビューを申し入れたが、断られてしまった。しかし、二重構造モデルが一九八〇年代に構築されたものだというコメントは、家族の方を通じて得ることができた。

さらにさかのぼってみよう。ここに、一九七六年の『歴史公論』一二月号に掲載された、埴原和郎、池田次郎、山口敏の鼎談がある。埴原はこのなかで、「縄文時代人でどうしても避けて通ることのできないものに、アイヌ系と沖縄系の人たちのことがあり

ますね」という興味深い発言をしている。一九九五年に刊行した『日本人の成り立ち』では、一九七一年一月に沖縄をはじめて訪れた時の強烈な印象を「自分は今朝札幌を出発したのに、どうしてここにも大勢のアイヌ系の人たちがいるのだろうか?」と記している。そして、「なるほど、ベルツがアイヌ・琉球同系論を唱えたのも無理はない」という感想を持ったとしている。筆者も同様なことを感じている。また、札幌で以前お会いしたあるアイヌ系の方からも、出張で沖縄にいったときに、親戚がたくさんいるような感じがしたとお聞きしたことがある。いずれにせよ、埴原の二重構造モデルは、ベルツのアイヌ・沖縄同系説に大きな影響を受けている。

アイヌ人と沖縄人が同一のクラスター(群)に入るという系統樹がはじめて発表されたのは、尾本恵市が一九七八年に池田次郎編「日本人II」に寄稿した論文のなかの図ではなからうか。このときは、八个の血清タンパク質の遺伝子頻度データに基づいたものだった。それから二〇年ほどして、尾本は筆者

との共著論文で、今度は二〇種類ほどの遺伝子頻度のデータを用いて、やはりアイヌ人と沖縄人が同一のクラスターに入る系統樹を発表した。二〇一二年には、数万カ所の単一塩基多型（SNP）データを用いた系統樹で、アイヌ人と沖縄人のクラスターが同一であることが統計的にゆるぎないもの（専門用語でいうと、ブーツストラップ確率が一〇〇%）であるとして、尾本や筆者が共著者となった論文でしめた。このように、遺伝学の分野から尾本は二重構造モデルを支持している。ただし、埴原が縄文時代人の源郷を東南アジアにもとめるのに対して、尾本は北方集団を起源と想定している違いはある。

百々幸雄（2015）は、自身の四〇年にわたる人類学研究をふりかえっている。百々は、多数の人類集団について形態小変異を検査し、それらを解析した。量的形質である頭骨などの計測値と異なり、形態小変異はある形質の有無を問題とするので、離散的形質である。また、年齢差、性差がほとんどないという特徴をもち、結果として、遺伝的におおきな変化

がなかったと考えられる、弥生時代以降の日本本土人はほとんど均一だった。百々とその共同研究者の研究により、縄文時代人とアイヌ人が近い関係にある一方、現代本土日本人が大陸の人々と近いことがあきらかになり、形態学的にみて混血説に決定的な根拠が与えられたといえよう。

一方、二重構造モデルについては、沖縄人の位置が少々つかいである。他の多くの形態学研究者がDNAの研究をきちんと紹介しないのとは対照的に、百々は筆者らが二〇一二年に発表した論文の集団系統樹を示している。この系統樹はアイヌ人と沖縄人がクラスターをなしており、二重構造モデルを支持しているが、一方で百々が指摘するように、琉球人からみると本土日本人が遺伝的にもっとも近い存在である。このため、百々は最近まで二重構造説を否定していた。しかし二〇一五年に刊行された書では、ふたたびわれわれの二〇一二年論文の最後の図を掲載して、二重構造モデルを肯定するのも否定するのも、「不毛の議論」だと、みずからを納得させてい

る。

筆者の見解では、沖縄人と本土日本人のあいだの関係については、二種類の置換説だと考えることができるかもしれない。埴原の二重構造モデルでは、歴史時代以降に本土日本人の混血が沖縄にあったことを無視している（あるいは当然のことだと考えたのか？）。一方で、沖縄人を本土日本人とほとんど同じだとした百々の主張は、縄文時代からの人々のDNAが今の沖縄人に大量に伝わった可能性を否定している。実際にはここでもやはり混血が起こっていたのである。

宝来聰（1997）は、ミトコンドリアDNAとY染色体の自身の実験的研究をもとにして、日本人の起源を追求した。基本的には混血説を支持したが、彼のしらべた二種類のDNAのデータには解像度に限界があり、それ以上に突っ込んだ解析はあまりできなかった。現代本土日本人において、縄文系と弥生系の割合が一・二という宝来の推定も、最近のわれわれの研究によって、縄文系の割合はもっとずっと

少なかったと推定されなおしている。

中橋孝博は、骨形態の研究者であり、九州大学で金関丈夫、永井昌文の流れをくむ、混血説ないし渡来説の本流である。その矜持があるのか、中橋（2005）においては、二重構造モデルについて、あまり多くは語られていない。わずかに、「縄文人のルーツ問題」でちらつと触れたあとは、「日本列島人の重層性」というセクションのなかで、山口（1999）の引用文（二五九頁）のなかに登場するにすぎない。もともと、山口（1999）の原文では、上述したように「二重構造」という言葉が使われているにもかかわらず、中橋（2005）ではあやまつて「二重構造」と引用されている。

おそらく、中橋は山口と同じく、日本人の二重構造というところへかたは、新規性がなく、それを埴原和郎の業績とされるのには批判的だったのではなからうか。中橋（2015）でも、「現代日本人の地域差——二重構造モデル——」と題されたセクションで、筆者らのDNA研究への言及はあるが、埴原和郎は

登場していない。無視することが最大の批判だとすれば、これはあきらかに中橋が埴原和郎の業績を無言のうちに批判していることになるだろう。

篠田謙一は、主として縄文時代人のミトコンドリアDNAのハプロタイプ頻度を現代人と比較することにより、日本人の起源を論じている。中橋と異なり、篠田(2015)では二重構造モデルを含めて大きくとりあげているが、「多くの研究者にとって、多層性は認めるものの、二重構造説の提示するシナリオの多くは受け入れがたく、縄文人や弥生人の起源地については不明であるというのが現状の認識でしょう」(一二三頁)と、かなりてきびしい評価となっている。この部分につづく「二重構造説のもつ視点」では、二重構造説を批判したあと、池田次郎の言葉を引用している。

最後に、筆者自身の研究について、回顧したい。埴原和郎や尾本恵市の講義を聴いて自然人類学を学んだ人間なので、彼らの影響を強くうけたことは否定できない。しかし、鈴木尚が遺伝性が小さいと示

した頭長と頭幅を埴原が使い続けたことは学生時代から疑問だったし、アイヌ人が東アジアの人類集団に近いという尾本の結果も、長年の混血があれば、そうなるのかもしれないと考えていた。しかし、アイヌ・沖縄同系説は、一貫して受け入れてきた。埴原が主唱した二重構造モデルも、ベルツのアイヌ・沖縄同系説の焼き直しにすぎないと考えている。

また、十分なデータがなければしつかりとした議論はできないことを、DNA研究について教えをうけた尾本や根井正利から教わった。このため、単一遺伝子や単一ウイルスの結果から日本人の起源を論じる論調には、ずっと懐疑的だった。ここという単一遺伝子には、ミトコンドリアDNAやY染色体も含まれる。二〇世紀には、まだこれらのデータか、あるいはいわゆる古典マーカーと呼ばれた血液型などのデータを用いることしかできなかったが、二一世紀になって、ヒトゲノムのデータを基盤とした膨大な核DNAのデータを扱えるようになった。そこでようやく日本人の起源問題に本腰を入れたたと

いうところである。

二重構造モデルを第一近似にとらえて、もうひとつの渡来の層があつたのではないかと考え、二〇一五年には「三段階渡来モデル」を提唱した。

五 日本人の起源研究をしばってきたもの

これまでの議論を総合すると、日本人の起源研究をしばってきた最大の要因は、「学派」ではなからうか？ これには、東西の差もあるだろう。東日本の研究者は、どうしても関東地方以北の骨のデータを使うことが多く、西日本の研究者は中部地方以南の骨を使う傾向がある。これによって、単に師匠と弟子という流れだけでなく、提唱される議論に差がでてくるのは否定できないだろう。

また、自然人類学は生物学的に人間をしらべているが、日本人の起源のような、きわめて小さい集団差を論じる研究分野では、なかなか明確な結果がでてこない。このような場合には、師匠が提唱した説

を弟子が批判しにくいという傾向が出てくるだろう。

もうひとつの構造的な問題として、人間自身を調べる研究特有の、倫理問題がある。植木(2008)は、幕末の英国人にはじまり、第二次世界大戦後にいたるまで、アイヌ人の墓があばかれたことを記述している。DNA研究においても、これは臨床研究の場から出発したものだが、現在では血液などの試料提供者に説明をしてインフォームドコンセントを得なければ、研究を進めることができないシステムになっている。

さらに微妙な問題として、政治権力およびそのとりまきとの関係がある。明治時代にコロポックル説を唱えた坪井正五郎について、筆者はかつて「私が昔から不思議に思うのは、坪井がなぜこの説に死ぬまで固執したのかということだ」(斎藤2006)と書いたが、坪井の伝記をあらわした川村(2013)は、これに関連して、保守思想の側からの圧力を受けたことのある三宅米吉から坪井が、日本人起源論に深入りしないように注意を受けたという(一一七―一

一九頁)。この忠告をうけて、坪井がコロボックル説に傾倒していった可能性があるという。

また、鳥居龍蔵が提唱した「固有日本人」という名称も、当時の社会情勢を反映している可能性があるだろう。大陸から渡来した人々を「固有」と形容するのは、論理矛盾である。坂野(2005, 2016)も、日本人起源論に関して、社会との関連を議論している。

日本人起源論は、現在でも政治権力そのものにしてばられている。宮内庁は「陵墓」および「陵墓参考地」を立ち入り禁止としており、自由な考古学的発掘ができない。これこそ政治権力が学問をしぼっている典型ではなからうか。近い将来、これらのしぼりが解き放たれることを期待して、本稿をおわる。

【参考文献】*姓のアルファベット順

von Balz E. 著、菅沼竜太郎訳(1979)『ベルツの日記』岩波文庫。

百々幸雄(2015)『アイヌと縄文人の骨学的研究——

骨と語り合った40年』東北大学出版会。

Dodo Y., Ishida H., and Saitou N. (1992) Population history of Japan: a cranial nonmetric approach. In Akazawa T., Aoki K., and Kimura T. eds., "The evolution and dispersal of modern humans in Asia", Hokusen-sha, Tokyo, pp. 479-492.

Hanihara K. (1991) Dual structure model for the population history of Japanese. *Japan Review* 2, pp. 1-33.

植原和郎編(1993)『日本人と日本文化の形成』朝倉書店。

植原和郎(1995)『日本人の成り立ち』人文書院。

植原和郎(1997)『日本人の骨とルーツ』角川書店。

長谷部言人(1951)『日本人の祖先』岩波書店(一九八三年、築地書館より近藤四郎の解説をつけて再版)。

樋口隆康(1971)『日本人はどこから来たか』講談社現代新書。

日沼頼夫(1986)『新ウイルス物語——日本人の起源を探る』中公新書。

古畑種基(1962)『血液型の話』岩波新書。

宝来聰(1997)『DNA人類進化学』岩波科学ライブラリー。

池田次郎・埴原和郎・山口敏(1976)「鼎談 人類学からみた日本人の起源」『歴史公論』一二月号、八七〜一〇二頁。

池田次郎編(1978)『人類講座 6 日本人Ⅱ』雄山閣出版。

池田次郎(1982)『日本人の起源』講談社現代新書。

池田次郎(1998)『日本人のきた道』朝日選書。

石田英實(2013)「池田次郎教授追悼文」*Anthropological Science* (Japanese Series) vol. 12, no. 2, pp. 85-87.

Japanese Archipelago Human Population Genetics Consortium (2012) The history of human populations in the Japanese Archipelago inferred from genome-wide SNP data with a special reference to the Ainu and the Ryukyuan populations. *Journal of Human Genetics*, vol. 57, pp. 787-795.

Jinam T. A., Kanazawa-Kiriyama H., and Saitou N.

(2015) Human genetic diversity in the Japanese Archipelago: dual structure and beyond. *Genes and Genetic Systems*, vol. 90, no. 3, pp. 147-152.

Jinam T. A., Kanazawa-Kiriyama H., Inoue I., Tokunaga K., Omoto K., and Saitou N. (2015) Unique characteristics of the Ainu population in northern Japan. *Journal of Human Genetics*, vol. 60, no. 10, pp. 565-571.

海部陽介(2016)『日本人はいつから来たのか』文藝春秋。

金関丈夫(1976)『日本民族の起源』法政大学出版局。

Kanazawa-Kiriyama H., Saso A., Suwa G., and Saitou N. (2013) Ancient mitochondrial DNA sequences of Jomon teeth samples from Sanganjii, Tohoku district, Japan. *Anthropological Science*, vol. 121, no. 2, pp. 89-103.

Kanazawa-Kiriyama H., Kryukov K., Jinam T. A., Hosomichi K., Saso A., Suwa G., Ueda S., Yoneda M., Tajima A., Shinoda K., Inoue I.,

and Saitou N. (2016) A partial nuclear genome of the Jomons who lived 3,000 years ago in Fukushima, Japan. *Journal of Human Genetics* (advance online publication).

片山一道 (2015) 『骨が語る日本人の歴史』ちくま新書。

川村信秀 (2013) 『坪井正五郎——日本で最初の人類学者』弘文堂。

近藤四郎ほか (1977) 『日本人の起源と進化』社会保険新報社。

松本秀雄 (1985) 『日本民族の源流——血液型遺伝子が明かすバイカル湖起源説』大陸書房。

松本秀雄 (1992) 『日本人は何処から来たか——血液型遺伝子から解く』NHKブックス。

Matsumura H. (2007) Non-metric dental trait variation among local sites and regional groups of the Neolithic Jomon period, Japan. *Anthropological Science*, vol. 115, pp. 25-33.

中堀豊 (2005) 『Y染色体からみた日本人』岩波科学ライブラリー。

中橋孝博 (2005) 『日本人の起源——古人骨からル

ミを探る』講談社選書メチエ。

中橋孝博 (2015) 『倭人への道——人骨の謎を追って』吉川弘文館。

中國英助 (1995) 『鳥居龍藏伝——アジアを走破した人類学者』岩波書店。

乳井洋一編 (1972) 『シンポジウムアイヌ——その起源と文化形成』北海道大学図書刊行会。

尾本恵市 (1996) 『分子人類学と日本人の起源』裳華房。

尾本恵市 (2016) 『ヒトと文明——狩猟採集民から現代を見る』ちくま新書。

Omoto K. and Saitou N. (1997) Genetic origins of the Japanese: A partial support for the "dual structure hypothesis". *American Journal of Physical Anthropology*, vol. 102, pp. 437-446.

Saitou N. (1995) A genetic affinity analysis of human populations. *Human Evolution*, vol. 10, pp. 17-33.

斎藤成也 (2005) 『DNAから見た日本人』ちくま新書。

斎藤成也 (2015) 『日本列島人の歴史』岩波ジュニア

新書。

斎藤成也 (2016) 「ゲノム配列とゲノム規模SNPデータが解明する現生人類の進化」『生物の科学 遺伝』第七〇巻、第六回、四六〇〜四六四頁。

斎藤成也監修 (2016) 『DNAでわかった日本人のルーツ——最先端科学が明らかにした縄文人』別冊宝島。

Saitou N. and Jinam T. A. (2016) Language diversity of the Japanese Archipelago and its relationship with human DNA diversity. *Man in India*, vol. 94, no. 4 (in press).

Saitou N., Kimura R., Fukase H., Yogi A., Murayama S., and Ishida H. (2011) Advanced CT images reveal nonmetric cranial variations in living humans. *Anthropological Science*, vol. 119, pp. 231-237.

坂野徹 (2005) 『帝国日本と人類学者——「八八四——一九五二年」勁草書房。

坂野徹・竹沢泰子編 (2016) 『人種神話を解体する——科学と社会の知』東京大学出版会。

篠田謙一 (2007) 『日本人になった祖先たち——DN

Aから解明するその多元的構造』NHKブックス。

篠田謙一 (2015) 『DNAで語る日本人起源論』岩波書店。

鈴木尚 (1960) 『骨——日本人の祖先はよみがえる』学生社。

鈴木尚 (1963) 『日本人の骨』岩波新書。

鈴木尚 (1971) 『化石サルから日本人まで』岩波新書。

鈴木尚 (1983) 『骨から見た日本人のルーツ』岩波新書。

鈴木尚 (2009) 『骨が語る日本史』学生社。

寺田一夫 (1975) 『日本の人類学』思索社 (一九八一年、角川文庫より、香原志勢の解説をつけて再版)。

鳥居龍藏 (1953) 『ある老学徒の手記』朝日新聞社 (再版二〇一三年岩波文庫)。

植木哲也 (2008) 『学問の暴力——アイヌ墓地はなぜあばかれたか』春風社。

山口敏 (1986) 『日本人の顔と身体——自然人類学から探る現代人のルーツと成り立ち』PHP研究所。

山口敏 (1999) 『日本人の生いたち——自然人類学の視点から』みすず書房。

戦後の光景

第二部

◆ 戦後の光景